

循環型社会を目指して

ごみの減量と並び、大切なのが「リサイクル」
 使えるものは再生利用することで、限りある資源の節約や
 地球温暖化対策につながります
 リサイクルは、誰もが取り組めるエコ活動の「入口」
 市内で取り組んでいる企業や個人に話を伺いました

Interview 1



ウジエクリーンサービス (迫町)
 経営企画部ディレクター
 菅原 亜希子さん

リサイクルに取り組む 3Rで内閣総理大臣賞を受賞

食品スーパーで毎日発生する野菜や果物の廃棄物は、有機質肥料にしています。肥料は、市内の契約農家や自社で使用し、コメや野菜などを生産。さらに生産したコメを加工して味噌や酒を作り、ウジエオリジナルブランドとして販売しています。リサイクルを循環させることで、食品リサイクル率70%を達成。ごみのリデュース(発生抑制)、リユース(再使用)、リサイ

クル(再生利用)に率先して取り組んできました。その実績が評価され、2015年度リデュース・リユース・リサイクル推進功労者等表彰で、最高賞の内閣総理大臣賞受賞や、低炭素杯2014環境大臣賞グランプリに輝きました。当社は県内に29店舗あり、1日当たりに発生する生ごみの量は約400キ。減らす努力はしていますが、この程度の量は発生

しません。リサイクルに取り組む前は、生ごみを可燃ごみとして処分しており、地球温暖化など環境に与える影響を懸念。環境にやさしい処理方法を模索していたところ、10年に現在使用している有機質肥料を作る装置と出会いました。この装置は、24時間で生ごみを完熟発酵。毎日生ごみが発生するスーパーにとって、24時間で処理できれば、ごみを溜めずに済みます。作業は①生ごみを投入②出来上がった肥料を取り出すと簡素化されており、誰でも作業ができます。

元々当社は、リサイクルと障がい者雇用の創出に取り組んできました。装置は、障がい者でも作業しやすいもので、リサイクルもできます。また、農家と連携して新たに商品を作るなど、一石多鳥の取り組みが可能となりました。今後は、この取り組みを利用し、イベントを開催することを考えています。例えば、家庭の生ごみをお持ちいただき、その分の肥料と交換。その肥料を使って野菜や花などを育ててもらえば。そのようなことができれば、おもしろいですね。



①肥料にできないごみを分別して、機械で細かく刻む。刻んだ後は、装置に投入②完成する肥料の量は、投入した廃棄物の10分の1

BDFは参加型のエコ活動 皆さんと一緒に進んでいきたい

当苑では、個人や店舗などで使用した廃食油を回収し、バイオディーゼル燃料(以下、「BDF」)を作っています。ご存じかもしれませんが、皆さんが大型スーパーの店頭や公民館に出している廃食油を原料にしています。回収量は年間7万リットルで、3分の2が飲食店やスーパーで使用した油です。それから精製したBDFの量は5万リットルで、登米市や

民間企業のほか、個人に販売。残りは、当苑でボイラーなどに使用しています。この事業は、2006年から開始しました。当時BDFは、新聞などに取り上げられ、限りある化石燃料を代替する燃料として期待されていました。また、石巻市の障がい者施設で、BDFを作っていることを知り、当苑でも知的障がい者就労場の創出と自立の一助になればと始めました。

取り組みに当たっては市に相談、協力いただきました。ちょうど市でもBDFの事業を検討しており、とんとん拍子で話が進み、約2カ月で稼働にこぎ着けました。BDFは、環境にやさしい反面、デメリットとして冬場に凍結する恐れがあります。廃食油は、植物系の天ぷら油だけを回収しています。しかし、料理に動物系の油も混じります。動物系の油は、融点が低いので、凝固する恐れがあります。凝固する以外にも課題はあります。昨年から販売量

が減ってきました。ディーゼルエンジンの進化により、BDFが使えなくなってきたのです。販売量のほとんどがバスやトラックに使われていたので、影響は大きいです。今後は、車の燃料としての使用は減ると思います。しかし、車以外にもボイラーや、建設車両などの燃料に使えるので、需要拡大を目指していきたいです。BDF事業は、障がい者の就労の場と市民皆さんが参加できるエコ活動。皆さんと手を取り合っていていきたいですね。

Interview 2



はんとく苑 (米山町)
 管理者 石川 明博さん



①廃食油が入っていたタンクを洗う施設利用者の皆さん。一人一人が回収から精製まで一連の作業を行います②精製したBDF(左)と廃食油